

清須城本丸付近の石垣の墨書

－「雑賀」「孫一郎」について考える－

浅井厚視

1. 『墨書』発見

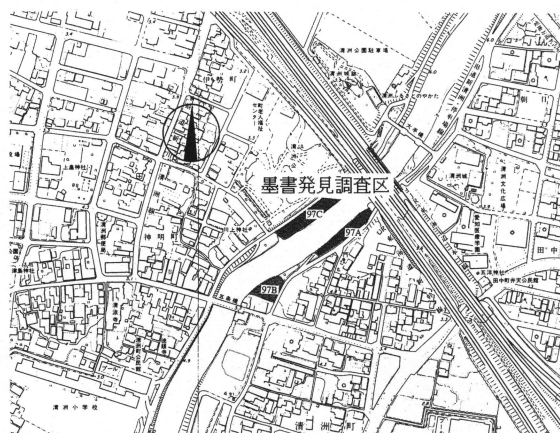
平成10年1月12日、雨で発掘調査が中止となったため現場の見回りを行った。強い風雨のため、ビニールシートがめくり上げられていた。ビニールシートの下には、平成8年度の調査で見つかり、取り上げたばかりの43個の根石と石垣石が置いてあった。シートを押さえようと近づいた所、石が雨できれいに洗われていた。『雑賀』とはっきりと読むことのできる墨書を見つけた瞬間であった。

3月7日の新聞各紙の朝刊は「清須城石垣から墨書を発見」という記事を伝えた。4月14日には、ある民放TV局が、この墨書の意味するところから「解明される清須城」という特集を組んだ。いずれも石垣に書かれた『雑賀』（さいか・さいが・「雑賀」なお、拙論では墨書の字については旧字体の「雑賀」を使い、それ以外の地名、人名などには教育漢字の「雑賀」を使うこととする）という墨書から清須城の築城について考えたものだった。

清洲城下町遺跡の発掘調査は昭和59年度から当センターや清洲町によって継続して行われている。五条川河川改修工事に伴う事前調査は、昭和61年度から実施され、平成9年度の調査は平成9年11月～平成10年3月までの期間、ABC3つの調査区（97調査区）で調査が行われた。

97C調査区は、平成8年度に見つけられた本丸付近の石垣遺構を取り上げ、移築保存し、さらにその下の遺構や遺物を調査することを目的としていた。この調査で以下のことが新たに確認された。

- (1) 清洲城下町遺跡の発掘調査で初めて、本丸付近の石垣から墨書が見つかった。



第1図 墨書が発見された調査区



写真1 墨書が出土した石垣

- (2) 石垣の裏込めから「花菱」の金箔瓦が出土し、金箔瓦をもつ建物が2時期にわたって建っていた可能性が高くなった。
- (3) 竹を交互にカゴ状に編んだシガラミを伴う角杭の列が見つかった。角杭列の外側に丸杭列も広がり、土地の拡幅工事が行われたことがわかった。
- (4) 普請に使用したと考えられる「大鋏」が胴木の下から出土し、大坂城下町期と同時期のもので清須城の改修時期を再考することができた。*1

石垣遺構には以下のものがあり、鈴木正貴の論

文に従い、用語を整理しておく。*2

○根石

石垣の最下段、土台木の上に置かれた基底石

○石垣石

根石の上に置かれた石材

○詰石

石垣を積む際にできる空間に詰め込んだ小石

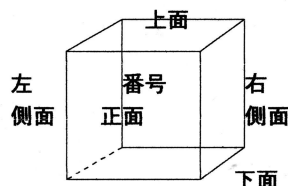
○栗石

石垣の裏込めの石

○墨書・刻印

石垣には、丸だとか三角だとか、家紋とか人名

石番	字の内容	字数	大きさ 縦×横 センチ	字の位置	種類	位 置
1	文字か記号かわからない 墨付あり（墨である）	?	?	上面	砂岩	根石
2	3文字あり □ふ仁か？ 仁は「に」か「太」かも	?	?	左側面	砂岩	根石
3	「いぬかい」「ち□」	6	い2×4ぬ1.5×3か2×3 い2×3ち3×3	正面	砂岩	根石
4	□雑賀	3	雑6×7 賀4×4	下面	砂岩	根石
5	□□ 前の字は升か	2		上面	砂岩	根石
6	雑賀（草書） □年（草書）貳・未？ 12とは字の手が違う	2 2	雑15×10 賀17×12 2字で 22×5	右側面 左側面	砂岩	根石
7	墨付あり（1文字）	1	?	下面	砂岩	根石
8	□雑賀	2	雑6×7 賀4×4 雑賀の左肩に文字がある	上面	砂岩	根石
9	雑賀 孫一郎	2 3	雑17×14 賀 13×17 孫4×3—1×4郎3×3	上面 右側面	砂岩	根石
10	六十五 判読不能（墨付あり）	3 ?	六5×6,5+5×3五4×6 ?	右側面 左側面	砂岩	根石
11	判読不能（墨付あり） 判読不能（墨付あり）	2 1?	? ?	右側面 下面	砂岩	根石
12	□□□ 判読不能（墨付あり）	3 ?	3文字とも字 真中は賀 梵字かも。 ?	左側面 下面	砂岩	
13	雑賀	2	雑5×4 賀5×4	左側面	砂岩	
14	卒□ □□ □ 3つに分かれている	5?	?	下面	砂岩	
15	十□ （墨付あり）	2	十3×4	下面	砂岩	
16	雑□（行書）	2	雑9×6	正面	砂岩	
17	判読不能（墨付あり） 判読不能（墨付あり）	? ?	文字か記号かわからない "	下面 左側面	砂岩	
18	判読不能（墨付あり） 雑□	1 2	? 雑13×8	右側面 下面	砂岩	
19	判読不能	?	?	下面	砂岩	



字の位置

判読不可能・・・墨付はあるが、文字がはっきりと
読めないもののことをいう。

とかが書かれたり、刻まれたりしている場合がある。石垣石や根石に墨で書かれたものを墨書、ノミ等で刻まれたものを刻印という。

拙論では、清洲城下町遺跡の発掘調査で初めて見つかった石垣の墨書について、調査内容とその調査から考えられることについて論を進めることとする（以下拙論では『墨書』とは石垣石や根石に墨で書かれたものの事を指している）。

2. 『墨書』に関する調査内容

(1) 調査の方法

出土した石垣は、五条川に向かった面を正面として石番を打ち、詰石や栗石をはずしてから一つ一つ重機で取り上げていった。石は堤防の上の空き地にならべ、水洗いをしたり、スポンジでたたいたりして土を落とした。出土した状態で上面を見てから、重機で石を反転させて下面も確かめた。石の種類については自然科学の担当者が石を取り上げるときに一つずつ観察した。

調査は平成10年の1月14日、22日、28日、30日、2月2日、28日、4月17日、5月22日の8回に及び、指導者の先生方をはじめとして多くの調査員の目で確かめた。根石や石垣石に番号（石番）をうった面を正面として、裏面、上面、下面、左側面、右側面と仮に名付けた。墨書の文字の解読については最終的に福岡猛志先生・下村信博先生にご指導をお願いした。

(2) 『墨書』の実際

43個の石は、砂岩が37個、濃飛流紋岩が3個、チャートが2個、細粒花崗岩が1個、花崗岩が1個であった。墨書が確認された19個の石はすべて砂岩であった。これらの砂岩は揖斐川水系の岐阜県海津郡南濃町から出土する広義の揖斐石、狭義の河戸石の可能性が考えられる。^{*3}

一つの石の2つの面に墨書が施されてあったも



写真2 石垣の取り上げ

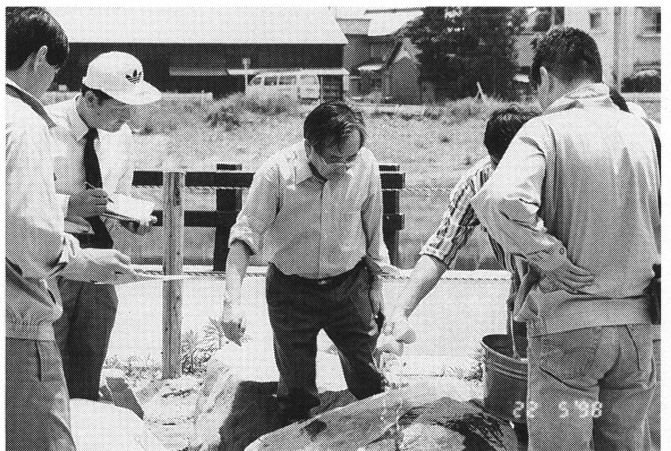


写真3 石垣に書かれた墨書の調査風景

のが7つ確認できた。そのうち「雑賀」と「孫一郎」と書かれたものが1つ、「雑賀」と「□年」と書かれたものが1つ、「六十五」と「墨付あり」が1つ見つかった。「墨付あり」とは墨跡ははっきりと見られるが、解読できなかった文字のことをいっている。

また一つの石の1つの面だけに墨書が施されてあったものが12確認できた。「雑賀」と書かれたものが1つ、「□雑賀」と書かれたものが2つ、「雑□」と書かれたものが2つ、その他「いぬかい」「ち□」と書かれたものが1つ、「十□」と書かれたものが1つ見つかった。墨書らしきものが書かれ墨付けはあるが判読不可能なものも多数見つかった。

福賀

10cm

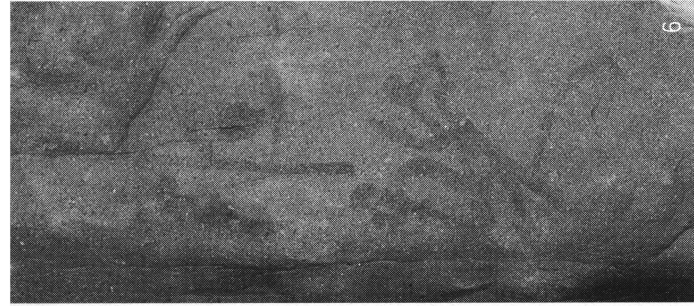


写真6 「福賀」

福

6 cm

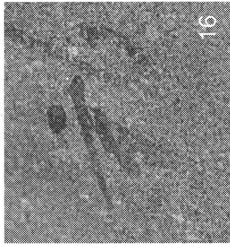


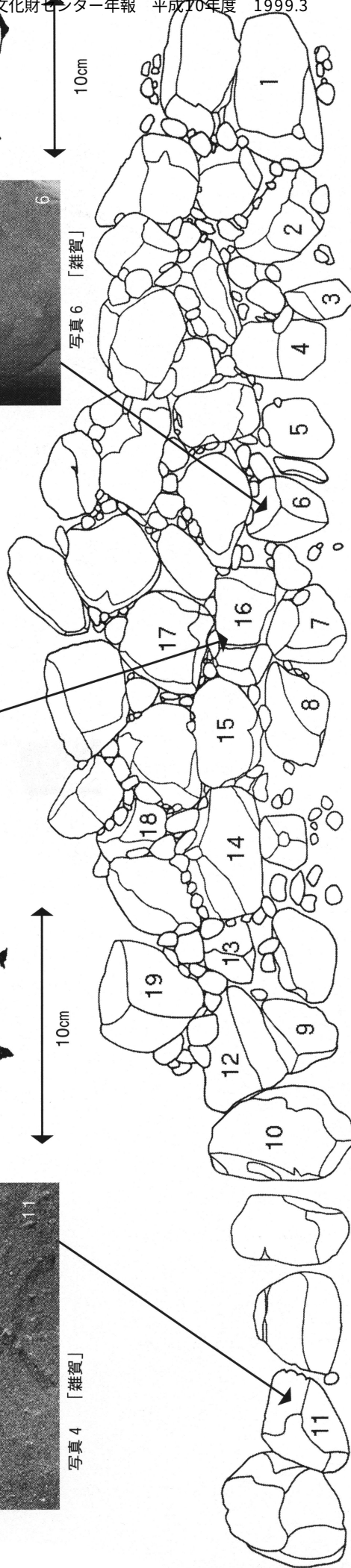
写真5 「福」

福賀

10cm



写真4 「福賀」



番号…墨書が見つかった石



第2図 墨書が見つかった石垣

石垣を組んだ位置から見て、石に墨書が書かれた位置は正面が2つ、上面が3つ、下面が9つ、右側面が5つ、左側面が6つあり様々であった。風雨にさらされることのない、目の届かない位置から多数見つけた。

また石垣遺構全体から考えると根石部分が10個、一段上の部分が5つもあり、石垣の下側の部分の残りがよかった。

3. 『墨書』に関する先行調査・研究

(1) 『墨書』に関する先行調査

ア 調査の概要

現在、戦国時代に築かれた城の石垣では石垣の途中が膨らむ「はらみ」や大荷重に耐えかねて石材が割れる「割れ」を生じ、崩壊の危険が高くなっている。そのため特別史跡に指定されている城跡では、保存整備事業の一環として、石垣の解体修理が実施されている。この解体修理に伴う事前の発掘調査や石垣の取り上げの中で、石垣に関する新たな発見がなされている。以下では、清須城と同じ天正年間の石垣として、安土城・豊臣時代の大坂城・肥前名護屋城の調査を、慶長年間ではあるが同地域の石垣として、名古屋城の調査を取り上げることとする。

イ 安土城の調査

安土城は天正4年～7年にかけて築城された、「総石垣造りの城郭として初現」に位置づけられる城である。現在までに「大手道」「大手門周辺」「黒金門周辺」「伝羽柴秀吉邸跡」「伝前田利家邸跡」「伝武井夕庵邸跡」「伝織田信忠邸跡」の石垣調査が実施されてきた。平成元年度からの発掘調査や石垣解体に伴う調査から、

- ・ 安土城の石垣の石材は湖東流紋岩を主体とし、石仏・五輪塔などの花崗岩製のものが転用されている。

- ・ この期間の調査では墨書、刻印のある石材は見つかっていない。^{*4}

などが明らかとなってきた。ただ安土城には伝承の墨書された石垣があり、数々の本で取り上げられ、石垣に書かれた墨書の始まりとされている。これは昭和35年からの主郭部石垣修理の際に、職人が総見寺へ運んだもので、「惟住内九□」と書かれており、「惟住（丹羽長秀）配下の九□」と考えられている。

ウ 豊臣時代の大坂城の調査

現在の大坂城の地表下随所に石垣があることが確認されたのは昭和34年であった。昭和54年の発掘調査では「地表下約3.5mに根石の据わる平均2段で、南北方向へ約30mも連なる石垣遺構と幅約30mの堀跡遺構」が検出された。これらの遺構は、天正11年（1583）の豊臣秀吉の本丸普請に伴うものと考えられる。昭和57年以降、毎年のごとく大阪城周辺や城内の発掘調査が実施されるようになった。その結果から

- ・ 石垣に使用されている石材は、自然石による野面積み工法と呼ばれる城郭石垣の初期工法で構築されていた。
- ・ 石垣石の裏側に使用される栗石の中には、石臼、五輪塔、石塔などの台石が混入されていたり、石垣石を支える詰石に石臼が利用されたりしている。
- ・ 石材は六甲山系の花崗岩、生駒山系の花崗岩が多く、生駒山系の安山岩、和泉砂岩、緑泥片岩は少量だけ転用されている。
- ・ 現在までに確認された豊臣時代の大坂城での符号は墨書だけで、音楽堂付近と追手門学院小学校付近で見つかっている。現在までに確認された墨書は、記号又は符牒的色彩が強いものが多い。

ことがわかってきた。^{*5}

エ 肥前名護屋城の調査

肥前名護屋城は、戦国時代の内乱を収めた豊臣秀吉が、全国の大名を動員して、朝鮮半島や中国への侵略を企て、その前線基地として短期間に築いた城である。天正19年10月～天正20年4月までのわずか半年間余りの工期で造られ、慶長3年に廃城となるまでの天正末期から慶長初期までの極めて短期間しか存在しなかった。昭和63年以降の「石垣修理」事業に伴う発掘調査の結果から、

- ・ 名護屋城跡では墨書、刻印は見つかっていない。
- ・ 名護屋城の正確な石材の丁場はわかっていないが、地盤そのものが安山岩系玄武岩で石材の調達が可能であった。
- ・ 石垣は野面石を主体としており、大きめな石は下方に小さめな石を上方に置いて、バランスを取っている。

などが明らかとなってきた。*6

オ 名古屋城の調査



写真7 名古屋城出土の墨書

名古屋城は慶長15年(1610)、徳川幕府の命令で天下普請の城として築城が始まった。加藤清正をはじめ多くの西国大名がお手伝い普請に参加せられた。一次から五次までの計画で進められ、

慶長19年(1614)に終了したと考えられ、慶長年間の石垣と推定できる。

特別史跡名古屋城の石垣に関する調査は、平成6年、塩蔵構石垣南面の補修工事として始まり、平成7年から8年にかけて、二之丸東門の修復工事として実施された。その結果から、

- ・ 尾張東部丘陵に花崗岩の露出層があり、ここから多く採取されている。赤津・菱野(瀬戸市)、岩作(長久手町)、山口(名古屋市)、岩崎山(日進市)、小牧山・大山(小牧市)などから採石している。また河戸石と呼ばれる堆積岩が養老山地の東麓、岐阜県海津郡南濃町あたりから多数採石されている。
- ・ 名古屋城の石垣では方形の規格化された石材を積み上げる間知積みが見られ、寛永年間に先だってこの技法が用いられている。
- ・ 墨書された内容としては、「中」「イ三」「イ二」「イー」「ロ五」「上ヨリ四四」「四十一」「の九」「の十九」「の三四」「さの五」「さの四七」「つの十三」など石の符号を示すものに混じって「西春日井郡」「高庭清右衛門」など地名や人名を示すものも見つかっている。

以上のことが明らかとなってきた。*7

(2) 『墨書』に関する先行研究

ア 研究の概要

平成10年11月、和歌山城大手門跡の発掘現場を訪ねたとき、20個を超える刻印のある石垣を見学させていただいた。このように中世、近世城館の発掘調査の中で新たに見つかる場合が多いようである。また各地域の城郭研究会の方々の努力によって、墨書や刻印の発見や採取が続いている。

これらの墨書や刻印の研究の解明も少しずつ進んでいるように思われる。「墨書・刻印の時期」「墨書・刻印が施された理由」「墨書・刻印の内容」に分けてまとめていくこととする。

イ 墨書・刻印の時期

墨書の時期については天正年間（1573-1592）か、それより以前の元亀、永禄にまでさかのぼるのではないかと考えられている。刻印のある城で最も古いのは織田信長が築いた安土城だといわれ、この安土城からは伝承ではあるが墨書も発見されているので、その頃から墨書と刻印の両方が使われていたと思われる。^{*8}

岡本良一氏は「刻印の起源は、おそらく無数の石材を必要とした近世城郭の誕生、つまり信長の二条城あるいは安土城普請のころ、その所有権を明示し、盗難を防ぐためのものとしてはじまったものだろう。もっともそのころのは刻みこむというような手間をかけたものではなく、たんに墨で書き付けたものであったらしい。（先年安土城の天守台跡から『惟住内九〇』と墨書のある石が発見されている）その墨書の形式は秀吉時代をへて（先年、地下鉄工事に際して、東区森の宮の日生球場前の地下から、秀吉時代の石垣石と考えられる石を掘り出したが、墨書で『にし大谷善四郎』とあった）、ほぼ慶長中期に及ぶようである。」「墨書から刻印への変化は、およそ慶長10年（1605）ころを境としているものと考えられる。」と述べている。^{*9}

天正年間～慶長10年にかけて墨書が施され、天下普請による大名や家臣の手伝い普請の増加によって、刻印という形に変化していったことがわかる。

ウ 墨書・刻印が施された理由

墨書・刻印が施された理由として、小和田哲男氏は「助役大名として天下普請にかりだされた大名が証拠として石工に彫らせたものが一つである。」「第二に・・・丁場をはっきりさせる、つまり丁場の境界を示すための刻印もある。」「第三に石の切り出しのときにつけられたものである。

大名から命じられた個数を示したり、誰の所有かを示したり、あるいはどこから切り出したかを符牒で示したりしたものである。天下普請の場合、石の所有をめぐる争奪が紛争にまで発展することがあり、それを未然に防ぐための措置だったのではないだろうか。」「第四には、石積みをしていく場合の工法上の符号として刻まれたものである。」「の4つをあげている。^{*10}

岡本氏も述べているように、墨書や刻印が施されたのは、石の所有権をめぐる争いが石切場や普請場で頻繁に起きたためであろう。争いを防ぐための目印であったと考えることができる。

さらにこれらは、家紋や旗印、馬印、什器の目印と同じような役目を果たし、石垣普請を命令した人やその石垣を見た人にとって、誰の普請場であるか、誰の所有に属する石であるのかがすぐわかるように表示していたと考えられる。^{*11}

エ 墨書・刻印の内容

刻印を施す以前は墨書であったことは前述した通りである。天正年間になると墨書と刻印の両方が使われるようになったわけである。

慶長年間以降の刻印を施す作業の中でも、根石や石垣石に墨書をし、それにのみを当てる工程がとられた。そのため刻印するために墨書したけれども、意図的にのみを当てなかったか、あるいは、のみを当てることを忘れたものが墨書として残ったようである。刻印を調べていくと、墨書されたすべてのものにのみをあてたのではなく、省力化を図るために簡単な文様だけにのみをあてているようである。

藤井重夫氏は刻印の意味する内容を以下のように分類している。「1 大名の定紋、略紋、略号、氏名の刻印 2 普請奉行、又は工事分担責任者たる家臣の定紋、略紋、略号、氏名の刻印 3 石材切り出し地の地名、略号に関する刻印 4 石工棟

梁に関する刻印 5 石材切り出しに関連した作業単位グループに関する刻印 6 石材運搬に従事した作業団体に関する刻印 7 石垣構築に従事した作業団体に関する刻印 8 石垣構築時の順番を示す構築番号の刻印 9 日付、寸法の刻印 10 石材寄進者に関する刻印 11 信仰、或いは呪術的な意味を含む刻印」

墨書の成立過程から考えて、墨書の内容についてもこれに準じて考えることができそうである。

*12

写真8 「孫一郎」(?)



写真9 「□年」(?)



4. 『墨書』について考える

(1) 『墨書』の時期

これまでの発掘調査から清須城は、居館を中心とした城から、石垣や瓦葺建物を伴い、総構の城下町をもつ城へと変化したと考えられる。天正大地震後の天正14年(1586)、織田信雄が行った清須城の改修が画期となっている。この改修によって、清須城は4つの曲輪と天守をもつ城となり、本丸は石垣や総瓦葺建物で造られ、軒先は金箔瓦が施された黄金の城に生まれ変わった。石垣は軟弱な五条川沿いに造られたため、胴木と呼ばれる土台木の上に造られたことがわかった。その後、清須城の城主は天正～慶長の短い期間に豊臣秀次・福島正則・松平忠吉・徳川義直と代わった。豊臣秀次も城の改修を行ったとされている。今回見つかった石垣の墨書は信雄の行った改修に伴うものかそれ以降のものと考えられる。*13

とすれば、清須城の石垣は天正年間に造られた「野面積み」の石垣となる。先行の調査・研究から考えると、豊臣期の大坂城と同時期のものとなり、刻印と共に墨書がよく用いられた頃のものと考えられる。豊臣期の大坂城のように石垣普請を担当した大名なり家臣の人名が多く残っている時期と重なってくる。

(2) 地名としての「雑賀」

『墨書』の「雑賀」が、石材を切り出した場所か、石垣普請に従事した作業グループか、石材を運搬したグループか、普請奉行又は工事責任者の出身地を示す地名とすれば、紀伊国雑賀庄(和歌山県和歌山市)以外には考えられない。例外として島根県松江市に雑賀町という地名があるが、これも紀州雑賀に由来した地名である。

雑賀は一般的には「さいが」とよばれる。雑賀孫一は「さいがまごいち」と通称でよばれている。しかし現在和歌山県和歌山市に残る地名は

「雑賀町」「雑賀屋町」「雑賀崎」「雑賀道」はいずれも「さいか」と呼ばれ、「小雑賀」のみ「こざいか」と濁ってよんでいる。『万葉集』には「狹日鹿」と記され、また戦国時代の『山科言継卿日記』でも「さいか」と書かれているので、「さいか」とよんだ方が正しい。

雑賀の地名の起源は鉏処であって、刀鍛冶の技術のこと「障処ということで障害のある険しい地名をさす」という両説があるが、一般的には鉄を鍛造するところという意味と考えられている。

戦国時代に根来衆や雑賀衆を生み出す鉄砲生産や「雑賀鉢」とよばれる鉄兜が生産される下地はこの地名からも推測することができる。*14

(3) 人名としての『雑賀』

ア 「雑賀」「孫一郎」とは

今回の『墨書』が、石材を切り出した人物か、石材を運搬した人物か、石垣普請に従事した人物か、割普請を担当した大名、大名の家臣、普請奉行又は工事責任者の姓名をあらわしている可能性は非常に高い。「雑賀孫一郎」とひと続きで書かれていれば人名に違いないが、今回の墨書では「雑賀」「孫一郎」が分かれて書かれていただけに名字と断定することはできない。しかし「雑賀」が地名であれば、「雑賀住」「雑賀衆」と書かれることが多いだけに、名字と考えるのが自然のようにも考えられる。

雑賀を名字とするか、孫一郎を名前としている戦国期に登場した人物として、織田信秀の家臣「雑賀修理」、織田信雄の家臣「雑賀松庵」「雑賀猿」「山本孫一郎」、紀州雑賀衆「雑賀孫一郎」、「その他の雑賀氏」をあげることができる。

イ 織田信秀の家臣「雑賀修理」

『信長公記』に「雑賀修理」という人が登場する。1554年の清須攻めで討ち死にしている。美濃

出身の人物で『山科言継卿記』に書かれている「さいか右京進定直」と同一人物と考えられている。清須城の築城が天正大地震後の織田信雄の時期と考えると活躍した時期が早すぎると思われる。*15

しかし清須城の石垣が信長以前からのものであり、それを転用したと考えるならば、可能性が全くないわけではない。

ウ 織田信雄の家臣「雑賀松庵」「雑賀猿」

『織田信雄知行宛〇并奉行人連署奉書』に「雑賀松庵」と「雑賀猿」という人物が登場する。雑賀松庵は織田信雄の5人の奉行人の1人で、上級家臣に属している。1500貫を所領し、後に小牧・長久手の戦いでは、秀吉より人質を要求された重臣6人のうちの1人でもある。松庵は信雄が南伊勢を領有していた時期（天正3年～）から信雄の代表的な奉行人として活躍した人物で、家臣全体の知行割決定に際しても信雄政権の重要な役割を果たした人物である。その姓からして、室町幕府の奉行人雑賀氏の系譜を引く可能性があると考えられている。雑賀猿は尾張国葉栗郡と丹羽郡に知行を得た人物である。*16

なお「孫一郎」という名前の家臣としては、山本孫一郎という人物が「織田信雄分限帳」に記載されている。蟹江、鰯江（弥富町）で400貫の知行を所領している。

清須城の改修に際して、信雄が家臣に割普請を命じた可能性は高く、石垣の墨書が信雄の有力な奉行人である松庵なり、山本孫一郎のことを示しているとも考えることも十分にできる。

エ 紀州雑賀衆「雑賀孫市」

この「雑賀」の墨書が見つかったとき、石山合戦以来信長と対峙した雑賀孫市ではないかと初めに考えた。「孫一郎」の名前が確認されてから

は、信長と対決した後、何らかの理由で信雄と手を結んだ証拠ではないかと思いを強めた。

雑賀孫市は謎に満ちた人物である。彼が石山合戦（1573年）で討ち死にしたのか、秀吉の雑賀攻め（1586年）で藤堂高虎によって謀殺されたのか、小田原攻め（1590年）にも参陣し、秀吉の鉄砲頭として生涯を終えたのか、さらに関ヶ原の戦い（1600年）では石田方につき、後に許されて水戸藩士となったのか諸説があってわからない。以下では孫市と考えられる3人の人物に分けて考えていく。*17

（ア）鈴木孫一重秀

石山合戦の侍大将として活躍したとされる孫一は彼である。孫一は信長の雑賀攻め（1577年）では雑賀衆の指導者として、徹底的に信長と交戦した。その後信長に近づき、土橋若大夫平次を滅ぼす際（1582年）には、信長の従兄弟の織田信張の助力を得ることとなる。孫一は信長が本能寺の変（1582年）で倒れると、後ろ盾を失って、実権を土橋氏に奪われ、雑賀を離れたようである。秀吉の雑賀攻め（1585年）では秀吉側につき、雑賀衆・根来衆を滅ぼす道案内の役を果たした。秀吉の雑賀攻めの後、孫一は姿を消した。

孫一と信張の関係については、「正月廿七日、紀州雑賀の鈴木孫一、同地の土橋平次を生害させ、・・・右の趣注進申し上ぐるの処、鈴木御見次として、織田左兵衛左大将（織田信張）として、根来、和泉遣わされ・・・」（『信長公記』）と記され、更に信長が信張に与えた書状の一節には「鈴木孫一参上、弥忠勤を抽んずべきの旨、神妙の由、能々其方に於いても、申し聞かせらるべく候」（『本願寺文書』）とあることによっても知ることができる。孫一を助けた織田信張は紀伊方面の軍政を担当し、後に織田信雄の有力な家臣となっている。『墨書』の「雑賀」「孫一郎」が

鈴木孫一重秀であるとすれば、彼こそが信雄と孫一をつないだ人物と考えられ、彼の仲介によって清須城の石垣普請を手伝ったとも考えられる。

しかし、本人の署名のある文書や本人宛て所とする文書、同時代の覚書などから見る限り、彼は一貫して「鈴木孫一」「鈴木孫一入道」であり、重秀のことを「雑賀」姓や「孫一郎」という名で記した資料は未だに見つかっていない。

（イ）鈴木孫三郎重朝（雑賀孫市）

小田原攻めの陣立書（『伊達家文書』）に「鈴木孫一郎」、名護屋城の駐屯者を記した『名護屋古城記』に「鈴木孫三郎」とあるが、これは同一人物をさし、豊臣家の鉄砲頭として活躍した孫三郎重朝でないかと考えられる。

関ヶ原の戦いでは石田方につき、戦いの口火となった伏見城攻め（1600年）を行った。慶長11年（1606）には徳川家康に起用され、徳川頼房に付けられ、水戸藩の家老となった。孫三郎重朝は後に雑賀孫市とも雑賀孫一郎とも称したと言われている。



写真10 平井孫一郎の墓碑（蓮乗寺）

『墨書』の「雑賀」「孫一郎」が孫三郎重朝であるとするれば、豊臣秀次の時代の清須城改修で石垣普請に辣腕を振るったことが想像できる。

しかし、もし彼が豊臣秀次期の清須城の改修に関わっているとすれば、その前後の信頼できる文書と照らしてみると、姓名を「鈴木孫三郎」と書いていたように考えられる。

(ウ) 平井孫一郎義兼

和歌山市平井の蓮乗寺には雑賀孫市の墓と伝えられている「平井孫一郎」の墓碑が残っている。蓮乗寺には本願寺顕如から下付された方便法身像もあり、孫市本人かあるいはその縁者に賜った物と考えられる。小牧長久手の戦い(1584年)では雑賀衆の指導者として信雄・家康側に立ち、和泉国の背後から秀吉を牽制したと考えられる鈴木孫一郎は彼のことでないかと考えられる。

オ その他の雑賀氏

その他雑賀姓を名乗った人物としては、毛利家の家臣である「雑賀三郎兵衛」「雑賀太郎」に繋がっていく地頭系の雑賀氏があげられる。また有力な雑賀衆の1人である「岡崎三郎大夫」(鈴木三郎兵衛重教)も雑賀姓を名乗っていた。

5. まとめ

清須城の本丸付近から出土した石垣に書かれた墨書について考えてきたことをまとめたい。

- (1) 織田信雄の清須城大改修に伴う石垣普請のものとするれば、『墨書』は墨書と刻印が共に施された時期のものであり、安土城、豊臣期の太坂城と同じ石垣に施された天正年間の墨書と考えることができる。
- (2) 墨書の内容としては、太坂城や名古屋城などで見つかっている墨書・刻印と同じように石垣の割普請に関わった大名、家臣、普請奉

行などの人名をあらわしていると考えることが有力ではないか。

- (3) 「雑賀」「孫一郎」は人名を示し、織田信雄の有力な奉行人であり、重臣であった雑賀松庵と考えることができるのでないか。
- (4) もし雑賀衆であったとすれば、織田信張を仲立ちとして織田信雄と関係のあった鈴木孫一重秀と考えることができるのでないか。

拙論は「清須城本丸付近の石垣と墨書」(教育愛知8月号)の原稿を多くの方に送付し、指導していただき、仕上げたものである。

和歌山市立博物館 太田宏一氏、滋賀県安土城郭研究所 小竹森和子氏、佐賀県立名護屋城博物館 高瀬哲郎氏、名古屋市立見晴台考古資料館 野澤則幸氏には資料をいただくと共に多くのご教授を願うことができた。城郭の刻印研究を続け、多くの研究報告をされている高田祐吉氏には参考文献を教えていただいた上に、清須城の墨書の写真やトレースなどでもお世話になった。『紀州雑賀鈴木一族』の著者鈴木真哉氏、『織田信長家臣団辞典』の著者谷口克広氏には電話や手紙を通じて多くのご教示をえた。また日本福祉大学教授福岡猛志氏、名古屋市立蓬左文庫下村信博氏には墨書の解説や文献資料などでご指導をいただいた。和歌山市の現地調査では、和歌山県文化財センター村田弘氏にご迷惑をかけるとともに最新の和歌山県の中世近世城館の発掘成果をご教授いただいた。

さらに発掘調査や石垣の取り上げは(財)愛知県埋蔵文化財センター石黒立人氏、黒田哲生氏の指導に基づいて行われた。宮腰健司氏、鈴木正貴氏には墨書について様々な助言をいただいた。この拙論をまとめるにあたっては、小澤一弘氏、武部真木氏、川添和暁氏の協力があって、初めてまとめることができたことも付記しておきたい。

小澤氏には、石垣のトレースでもご迷惑をおかけした。

なお石垣石の種類・分類については堀木真美子氏の指導に頼った。

また発掘補助員山内富正氏、重機オペレーター大倉一孝氏、発掘作業に従事していただいた30名の作業員の皆さんの献身的な仕事によりたくさんの墨書が見つかったことに深く感謝したい。

社)

『和歌山県地名大辞典』(角川書店)

*15 奥野高広『信長公記』(角川書店1997)

*16 加藤益幹「織田信雄の尾張・伊勢支配」(有光友学『戦国権力と地域社会』吉川弘文館1986)

*17 鈴木真哉『紀州雑賀衆鈴木一族』(新人物往来社1984)

『和歌山市史本文編』

参考文献

『紀州雑賀一族』 鈴木真哉 新人物往来社
昭和59年

『大坂城の謎』 村上行宏 学生社 昭和45年

『織田信長家臣団辞典』 谷口克広 吉川弘文館
平成7年

『石垣普請』 北垣聰一郎 法政大学出版局
1987年

『98特別展 雑賀衆と織田信長』 和歌山市立博物館
平成10年

『名古屋城の石垣と刻印』 高田祐吉

脚注

- *1 平成9年度 愛知県埋蔵文化財センター
『年報』清洲城下町遺跡
- *2 鈴木正貴「清須城の城郭構造に関する予察」
(『織豊城郭』第5号)
- *3 石の種類については名古屋市立見晴台考古学資料館野澤則幸氏からご指摘を受けた。
- *4 小竹森和子「安土城における石垣整備の歴史と評価」(『滋賀県安土城郭研究所研究紀要』第5号)
- *5 藤井重夫「石からみた大坂城と城下町」
(平凡社)
「豊臣前期の武家屋敷と大坂城三の丸北側石垣現地説明会資料」(大阪府教育委員会)
- *6 高瀬哲郎「名護屋城の築城と改造について」
(『佐賀県立名護屋城博物館研究紀要』第1集)
- *7 高田祐吉「二之丸東門石垣刻印調査報告書」
高田祐吉「塩蔵構石垣南面刻印調査報告書」
- *8 高橋延年・柳史明『吉田城の石垣と刻印』
大洋プリント1972
- *9 岡本良一『大坂城』(岩波書店1993)
- *10 小和田哲男『城と城下町』(教育社1979)
- *11 高田祐吉『特別史跡名古屋城の石垣の刻印』
- *12 高橋延年・柳史明前掲書
- *13 鈴木正貴「清須城」
- *14 『和歌山県の地名』日本歴史地名大系(平凡